

## 論文

### 「三つの一神教における宗教と紛争・・・平和への道筋はあるのか」

(全 10 回)

塩尻和子 (筑波大学名誉教授)

本論文は 2022 年 11 月から 2023 年 3 月まで、NHK 文化センター埼玉スーパーアリーナ教室において計 10 回の講座 (オムニバス形式) として発表したものである。筆者は、昨年 2 月以降のロシアによるウクライナ侵攻を契機として、改めて世界の平和を考慮する際に、今日の世界で社会的にも経済的にも大きな影響力を行使する一神教、つまりユダヤ教、キリスト教、イスラームの歴史的な相互関係から今日の紛争の在り方を検討し、拙いながらも、人類の生存をかけた平和への道筋の構築を模索するものである。

読者の皆様の忌憚のないご意見をお待ちしています。

## 第 2 回 「ユダヤ教から始まる歴史、アブラハムの宗教」

塩尻和子 (筑波大学名誉教授)

### ① 古代イスラエルの一神教

ユダヤ教、キリスト教、イスラーム、一神教と分類されるこれらの宗教はいつから始まったのか？一般にはヘブライ語聖書 (旧約聖書) の記述に従って、紀元前 2000 年ころ、ユーフラテス川のほとりで牧羊を営んでいた族長アブラハムが唯一の神ヤハウエのみを信仰するようという命令に従って、この神と契約を結び、自らのヘブライの民が神によって選ばれた特別な民であり、この民が繁栄する場所として約束の地カナーンを与えられたことから始まるとされている。この「アブラハム契約」では神は一方的にヘブライ人の人口を増やし、約束の地カナーンを与えたとされる。しかし「約束の地を与える」という契約は、本来、黙っていても与えられる土地ではなかったのである。「約束の地」に到着するまでには、ヘブライ人たちは移住していった各地で先住民たちとの命がけの戦いを繰り返していくことになる。

やがて長い年月がたち、ヘブライ人たちは飢饉を逃れてエジプトへ移住するが、エジプトでファラオの圧政に耐えられず、モーセに率いられたヘブライの民は、再び約束の地、カナーンへ戻ろうとする。しかし、その旅路はまたしても先住民たちとの激しい戦闘に打ち勝って初めて通り抜けられる道のりであり、苦難の末にたどり着いた約束の地カナーンもすでに他民族の郷土となっていた。こうして、神との契約による約束の地は、自ら戦いに勝って初めて手に入る「土地」であった。

ヘブライ人は、世界を創造した唯一の神との契約によって、将来には必ず世界を支配する聖なる選民になるという立場を約束されたが、それは「与えられる」というより「自力で勝ち取る」というべきものであった。ここからユダヤの民は神によって運命づけられた苦難の

歴史を今日まで生き続けることになるのである。

宗教学における宗教の分類という観点からは、アブラハム契約までを「自然発生的な民族宗教」と定義し、出エジプト記以降の形態を「モーセを創始者とする創唱宗教」と考えられる。民族宗教の時点では、ユダヤ教も日本の神道と同様に、特定の民族と文化を中心として自然発生的に興った宗教として分類される。しかし、その後の「出エジプト記」以降のヘブライ人の歴史は、モーセという指導者によって導かれる特定の宗教へと変貌を遂げ、創唱宗教の一つに仲間入りしたと考えられている。

この経緯については、多くの研究から様々な見解も呈されていて、最近の碑文研究からは、モーセを創始者とするには学術的な疑問が見つまっているようである。当時のヤハウエ信仰は、多くの神々の中から一つの神を選んで崇拝するもので、ヘブライ人の中には長期間にわたって多神崇拝も同時に行われていた。明確に唯一の神、ヤハウエだけを崇拝するようになるのはバビロニア捕囚期（前 586～前 538）以降のことになる。

歴史の過程では常に存亡の危機に瀕していたこの弱小民族が、世界を支配する唯一絶対の神を信仰するようになった経緯には再検討が必要である。同時になぜ、この一神教がユダヤ教となり、キリスト教・イスラームへと引き継がれていったのか、この経路にも謎が残るが、この問題については、今後、ゆっくりと辿っていくことにしたい。

## ② 三宗教の共通性—アブラハムの宗教

話はすこし高跳びしてしまうが、ユダヤ教・キリスト教・イスラームの関係性について、ヒントとなるものとして、アブラハムの役割を挙げておこう。

イスラーム教徒が行うマッカ巡礼は、もともとイスラーム独自の儀礼ではない。そのなかには、アラビア半島に伝わる習俗などから受け継いだものが多い。たとえば、悪魔の柱といわれる石標に小石を投げつける悪魔祓いの行事や、聖なる黒石を納めたカアバ神殿を左回りに七回巡行（タワーフ）することなどは、イスラーム以前のアラビアの風習である。イスラームでは、これらの風習に新たな解釈と意味が追加された。つまり、悪魔の柱とされる石標は、イブラーヒームとその息子イスマーイールに降りかかった悪魔の誘惑の故事に由来し、その石標に小石を投げることによって悪魔を追い払うことができるとされた。

イブラーヒームとはヘブライ語聖書の創世記にヘブライ人の祖として登場するアブラハムのことであり、息子イスマーイールはアブラハムの長子イシュマエルのことで、聖書ではアラブ人の祖となつたとされる。石投げの儀式自体は、悪魔祓いとしてアラビア半島の伝統に従ったものであるが、そこにはヘブライ語聖書の伝統も生きている。

巡礼行はカアバ聖殿を七回まわる巡行（タワーフ）の後、サファーとマルワという小高い丘の間を小走りで三往復半する。これはイブラーヒームの妻ハージャルがその子イスマーイールのために水を求めて走り回ったという故事に基づいている。ハージャルとはヘブライ語聖書ではアブラハムの妻サラに仕えていたエジプト人の女奴隷ハガルのことである。幼子イスマーイールが踵で掘り当てたといわれているザムザムの泉はカアバ聖殿の中庭にあり、現在でも聖水が湧き出している。カアバ聖殿のすぐそばにはイブラーヒームの立ち所

といわれる場所もあり、石の上にイブラーヒームのものとされる足跡が残されている。

ヘブライ語聖書のアブラハムはイスラエルの民を約束の地カナーンに導いたが、イスラームにおいては、イブラーヒームはカアバ聖殿を創建し、純粹の一神教徒としてイスラームの礎を築いたのである。

イスラーム暦で義務の巡礼の最終日にあたる 12 月 10 日は犠牲祭となり、全世界のムスリムは各自の場所で動物犠牲を捧げて祭礼を祝うが、巡礼者も聖地にあつて犠牲を捧げる。一般には羊を屠って犠牲とするが、この行事もイブラーヒームとその子イスマーイールの故事に由来する。

ヘブライ語聖書の創世記 22 章によれば、族長アブラハムは年取ってからやっと恵まれた息子イサクを神の命令に従って犠牲に捧げようとした。この物語についてはクルアーンでも同様に語られているが、息子はイサクではなくイシュマエルとなり、その母はイブラーヒームの妻ハージャルになっている。聖書の記述では、正妻サラの産んだ次男のイサクはイスラエル族の祖となり、イシュマエルはアラブ族の祖となつたとされるために、クルアーンではイブラーヒームとイスマーイール父子の物語に変更されている。

イスラーム世界でもっとも重要な祭礼として毎年盛大に祝われる犠牲祭は、このようにヘブライ語聖書とクルアーンの双方にまたがる由来を持っている。しかし、犠牲祭を重要な祭礼として祝うのはムスリムだけであり、ユダヤ教でもキリスト教でも、この犠牲祭を祝うしきたりはない。

アブラハムはユダヤ教だけでなく、キリスト教とイスラームにおいても、宗教上の礎であり、最初の一神教徒である。それゆえにこそ、イスラームの神もユダヤ・キリスト教の神も同じ「アブラハムの神」なのである。

### ③神はだれのもの？

#### 「選民の神」

ヘブライ語聖書の創世記には、神がイスラエルの族長アブラハムに現れ、他の神々への信仰を廃してヤハウエと名乗る神をのみ信仰することと引き替えに、彼の部族を偉大なる民となし、乳と蜜の流れる地、カナーンを与えると約束したと記されている（創世記 12 章 1～3 節）。これがユダヤ教の「契約」の始まりである（創世記 35 章 12 節）。この神の約束は、カナーンの土地だけに向けられたものではなく、ユダヤ人が選ばれた民としてやがては世界を支配するという「予言」も含んでいる。これがいわゆる「選民思想」である。

ユダヤ教においては他の二つの宗教と比べると、「神」は独自のかたちをもっている。ここでは、神はユダヤ人が神から与えられた律法に従うかぎり絶対的な神であるが、ユダヤ人が存在しなければ、あるいはユダヤ人が神の命令に背いたなら、神はもはや「神」ではなくなる。ユダヤ教の神は、イスラエルの民にとってのみ唯一の絶対者であり、天地の創造主であり、歴史を支配する人格神である。したがって、ユダヤ教は、天地の創造主であり全知全能の神をいただく宗教でありながら、普遍的な世界宗教とはならなかった。

### 「万人の父と絶対的支配者」

アブラハムに現れた「神」は、やがて全知全能の人格神としてキリスト教とイスラームに受け継がれていく。限定された「神」を、生ける神として万人の父となしたのがイエスでありキリスト教である。キリスト教では、神の子イエスを通して神を信仰するという形態が、三位一体説によってさまざまに解釈されることになる。

最後に、この神を絶対的超越的な支配者としてさらに普遍化させ、すべての人間は生まれながらに、直接、神に服従する者（ムスリム）としたのがイスラームである。

全知全能の超越的な神が、人間世界から隔絶した存在でありながら、「啓示」によって自らの意志を伝えるという点では、ユダヤ教もキリスト教もイスラームも変わらない。キリスト教やイスラームでは、ユダヤ教のような特定の選民思想はみられないが、いかなる人も啓示された神の命令に従うことによって、神との契約が成立すると考えられている。啓示された神の意志、つまり「神の言葉」である聖書（聖典）の教えに従うことによって、人間は神に選ばれた存在となる。そういう意味ではキリスト教にもイスラームにも「人間ならだれでも」という普遍的な選民思想が存在するということができよう。

#### ④ 三宗教の関連性

シカゴ大学の高名な宗教学者であったW・C・スミス (Wilfred Cantwell Smith, 1916-2000) がキリスト教とイスラームを対比して次のようなチャートを作成したことはよく知られている。

クルアーン……イエス・キリスト  
ハディース……聖書  
ムハンマド……パウロ

イスラームの聖典クルアーンにイエス・キリストが対応するのは、新約聖書のヨハネによる福音書の冒頭にみられるように、イエスには地上に降りた「神の言葉」という深遠な意味があるからである。イエスはキリスト教の創始者であると同時に「神のロゴス」として神の言葉が地上に顕現したものと考えられている。つまり聖書の神の言葉はイエスを通して人間が語る言葉となり、その言葉によって地上に神の意志を伝えたのである。そういう意味では、聖書は「人間が語る神の言葉」であり、人間が語るものとして、人間はそれぞれの民族の言葉で聖書を詠むことができるのである。

一方のクルアーンは神が選んだアラビア語を用いて神自身が語った散文詩を、一語一句紛れもない永遠の神の言葉として、啓示されたままに書きとめたものであるとされる。クルアーンはあくまでも「神の言葉」であるために、他の言語に翻訳すれば、もはや神の言葉ではなくなる。そのためにイスラーム教徒ムスリムは、母語が何であれ原語のままのクルアーンを声に出して朗唱することによって、日々、神に出会うことができるとされている。そういう意味では、クルアーンは「神が語る人間の言葉」であり、人間はだれであれ、神が選んだ神の言葉を、そのままに唱えなければならない。

人間世界から隔絶した全知全能の一神教の神と、神の僕にしか過ぎない人間をつなぐ手

段として、キリスト教では「神の子」という救世主キリストが与えられている。イスラームでは救世主でも神の子でもなく、まぎれもない神の言葉としてクルアーンが与えられている。そう考えると、スミスのチャートからはそれぞれの宗教の深層がみえてくる。

イスラームでは、信徒は神の言葉であるクルアーンを朗唱することによって、全能の支配者である神と出会い、その救いを受けることができるのである。この問題は教義として重要な論点であり、今後も検討を続けて行くことになる。

イスラームの第二の聖典と言われるハディースは預言者ムハンマドの生前の言行録であり、いうなれば彼の生涯の記録である。創唱者の一生の記録としては、聖書、とくに新約聖書の最初の四福音書に対応する。

しかし、スミスによれば、預言者であるムハンマドはキリスト教ではパウロと対比される。イスラームの創唱者であるムハンマドが、パウロと対比されるのは、それぞれの宗教を民族の枠を超えて普遍的な世界宗教へと拓く契機を作ったからである。それぞれの宗教の創唱者としての立場を示すとすれば、ムハンマドにはやはりイエス・キリストが対応するであろう。しかし、両方の宗教とも、真の意味の創造者は「神」であると考えれば、スミスの対比は意義深い指摘である。

別紙の3宗教の対照表の「聖典」の個所からわかることは、イスラームにはクルアーンのほかにもユダヤ教やキリスト教の聖典が認められていることであるが、これは、先行する聖典が与えられているところに最後の最高の聖典としてクルアーンが啓示されたと考えられるからである。

イスラームでは、こうして聖典を共有するという立場から、ユダヤ教徒もキリスト教徒も、同じ聖典を共有する者「聖典（啓典）の民」と呼ばれる。しかし、ユダヤ教・キリスト教の側からは、イスラームを同一の伝統上にある宗教「アブラハムの宗教」として認定することは、長い歴史を通じて、なかったのである。